

地域の「農文化」を担う獣医師を育てる

谷山弘行[†] (酪農学園大学学長)



1 はじめに

日本の食料自給率は39%とされている。しかし、一方で年間11.1兆円もの額にのぼる食べ物が捨てられている。量にして約2,000万トン、約2,000万人の一年分の食料に相当するといわれている。この食料廃棄がその大半を輸入に頼らざるを得ない国で起きているわけである。わが国の農水産業を合わせた総生産額が12.4兆円、ほぼこれに匹敵する金額の食料が捨てられている。日本の食料生産基地と言われる北海道の農生産額のほぼ10年分が1年で捨てられている勘定になる。現代の世界に共通する脅威は、食料の不足と「食」の安全・安心が保障されないことである。67億の世界人口のうち9億人が飢餓に苦しみ、多くの国で「食」の安全が脅かされている。食料分配の偏りと食の質の不安が現代の世界である。こうした世界の食料事情の中で、産業動物医療を通して食料生産に貢献する獣医師の役割は益々大きくなっていると思うのだが、わが国においては産業動物医療に従事する獣医師の不足が危惧されている。農林水産省は「獣医師の需給に関する検討会報告書(2007)」の中で、産業動物の飼養頭数が現状を維持してもかなりの数の獣医師が不足する見通しを示した。これからの産業動物医療に従事する獣医師のあるべき姿とは何かを考えてみたい。

2 生産動物医療獣医師を希望する学生の進路動向

私が勤務する酪農学園大学獣医学部獣医学科に入学してくる新生生のうち、生産動物医療獣医師を希望する学生は、全体のおおよそ1/3程度である。これは酪農学園大学の名が示すとおり、生産動物医療獣医師の養成大学として選択して来る者や、北海道の牧歌的地域性にあこがれを持って入学してくる学生の数を表しているのかも

知れない。しかし、年次が上がるにつれ生産動物医療獣医師を希望する学生は1/4、1/5と減少してくる。これは年次が進むとともに社会の情勢が見え、特に生産動物医療に従事する獣医師の活動実態が見える様になるからではないか。また、学外実習等を通して現役獣医師の苦労や現在の農業の厳しい状況を目の当たりにし、そのような結果を産むのではないかと想像する。しかし、これは決して生産動物医療獣医師への希望をあきらめた結果ではない。日本の農業事情や生産動物医療体制の中で揺れ動く獣医学生の心情を察すれば、農業の重要性が理解され、自らが貢献できる場所が見つければ事情は大きく変化すると考えるからである。

酪農学園大学獣医学科では毎年、新入生に対し獣医学概論や臨床獣医学入門等の授業の中で「獣医師の使命」、「獣医師の活動分野」、「就職動向」等について講義するとともに、学外からそれぞれの分野の獣医師を講師として招き職域の説明、活動内容、労働環境、待遇等に加え、職員としての心構えや生きがいについても講演をお願いしている。とくに生産動物医療については北海道NOSAIに勤務する獣医師や開業獣医師を招聘し、その職域の重要性や働く獣医師の意気込みを生々の声で語ってもらっている。また、家畜保健衛生所や食肉検査所に勤務する獣医師にも、生産動物医療獣医師との連携の重要性を説いてもらっている。さらには「NOSAI全国」を窓口とする夏期臨床実習や「北海道NOSAI」が行う冬期・春季臨床実習も積極的に参加するよう指導をしている。こうした中で、酪農学園大学の就職状況は、2003～2007年においては年平均20名を超える数で推移しているが、これは就職希望者数を下回る数字である。

3 北海道における生産動物医療獣医師採用の動向

北海道NOSAIの平成20年度の資料によると、求人数41名に対し受験者数は63名、合格者51名であったが、最終的には38名(女性16名)の採用であった。北海道NOSAI組合では平成13年から採用枠を広げ、世代交代

[†] 連絡責任者：谷山弘行 (酪農学園大学)

〒069-8501 江別市文京台緑町582 ☎011-386-1111 FAX 011-386-1214 E-mail: taniyama@rakuno.ac.jp

に備える採用体制を整えてきている。その結果、年々、採用者数は増えてはきているものの、現在でも採用計画を充足出来ていないと言う。平成9～20年間の採用獣医師の出身大学は、酪農学園大学がもっとも多く、ついで麻布大学、帯広畜産大学、日本大学、岩手大学、北海道大学、鹿児島大学の順になっている。獣医師不足を打破する目的として、「北海道NOSAI」は、獣医師採用支援として幾つかの事業を立ち上げている。北海道の獣医3大学(酪農学園大学、帯広畜産大学、北海道大学)との連絡協議会開催による情報交換、インターンシップの実施、産業動物臨床講義に関わる講師の派遣、冬期・春期臨床実習支援奨励など、積極的対応を北海道地区に限定せず全国の獣医大学の学生を対象に活動を継続して行っている。しかし、これらの支援事業に呼応する学生の数も年々増加しつつある事は事実であるが、「北海道NOSAI」組合の実習受け入れ人数からすると遥かに少ない。

4 全国の生産動物医療獣医師採用の動向

2008年度の全国の農業共済団体の獣医師採用状況は募集人数113名に対し、採用は91名であった(NOSAI全国資料, 2008)。受験者数は延べ164名、内定者数は119名、採用91名(女性33名)。採用は北海道がもっとも多く42名。鹿児島県8名、宮崎県6名、岩手県5名とつづき、19県で1～4名である。これらの数字は東北・北海道と九州が酪農・畜産を主要産業としている事を表している。注目される点は女性の進出である。北海道の16名をはじめ16の道県で採用されており、7県では女性のみ採用となっている。

こうした獣医師の不足に対し、全国の農業共済団体は待遇改善に取り組んでいる。しかし、給与体系は地方行政のそれを基準としているし、地方行政の給与は国家公務員の給与が基本となっていると聞く。6年制教育を修めた獣医師の給与が医師や看護師、薬剤師のそれに比較してかなり低い水準にある事は理解に苦しむ。農業共済団体はそれぞれ手当て等を工夫して給与の改善を図っているが、根本的改善には至っていない。また、女性獣医師の採用に当たっては施設、設備の充実や、産休など勤務体制の改善なども押し進められてきているが、現役女性獣医師からは十分とは言えないとする声も聞こえる。最近、獣医師の学術支援として学位取得や学会参加等に対する奨励措置や研究活動についての勤務条件の配慮など、かなり踏み込んだ制度の改革を進めている農業共済団体が増えてきている。このような地方、全国NOSAIの試みは決して無駄にはなっていないと考えられるが、さらに丁寧な情報発信と獣医大学との連携を進めていけば、将来ともかなりの改善が期待できる状況にあると思う。しかし、NOSAI独自の待遇改善だけでは自ずと限界があることは言うまでもない。それは現在の農業の置

かれている状況が、獣医学生の生産動物医療への意欲に陰を落としているからである。

5 北海道農業の動向と問題点

戦後の北海道の食料生産技術の発展は目覚ましいものがあり(北海道農政部及び北海道開発局資料, 2008)、都道府県別の食料自給率は1位を誇る。北海道192%, 秋田167%, 山形131%, 新潟99%, 佐賀94%, 岩手86%, そして青森84%となっている。しかし、一方で北海道農業が抱える最大の問題は、農家個数及び農業人口の激減と農家所得の低さである。1960年には233,634戸あったものが、2003年には、66,690戸(28.5%)に減少した。また、農業所得は全国の3.8倍に達するが、農家所得は1.03倍とほとんど変わらない。2007年現在、北海道の乳牛飼育頭数は836,000頭、農家数は8,310戸である。全国の頭数は1980年に比較して76%に減少し、農家数は22%に減少した。北海道では逆に111%と増加しているが、農家数は39%に減少した。このことから北海道酪農は多頭飼育化へと推移し、集約的営農が進んでしている様に思える。生産動物医療体制もNOSAI合併による広域化などでこれに対応しているが、そこで働く獣医師の勤務形態は昔に比べ大きく変化したと聞く。

6 わが国の農業の姿

わが国の農業は、WTOの加盟によって貿易の自由化や保護政策の段階的廃止を要求され、市場主義経済の真っ直中にある。今や「食」と「農業」は政治的問題として国際政治力学の中で肥大化しつつあり、その課程で「食」を支える「農業」の意味も大きく変貌したと言われている。単なる「食料」生産手段としての「農業」、政治戦略手段としての「農業」が普遍化しつつあり、永く農村の歴史を支えてきた「農文化」の消滅が、今日の日本の姿ではないか。最近、限界集落と言う言葉が聞かれる。以前には過疎化、過疎地などという言葉があった。過疎とは人口の急激かつ大幅な減少によって地域社会の機能が低下し、住民が一定の生活水準を享受することが困難になった状態である。過疎化が進行し、地域社会の機能を喪失した集落を限界集落と言うのだそう。そして、この二つの言葉を使って「過疎地の限界集落化」と言う現象も生じている。限界集落とは65歳以上の人口が50%の集落を言い、これを超えていくと廃村集落と言うそうである。

農業生産性は伸びているのに、農業人口の減少に歯止めがかからない。メガファームなどと呼ばれる大規模農場の出現は、現代のあるいはこれらの農業の在り方の一つのモデルとも言われている。さらに、法人化農場が出現し、年々増加しつつある。高い生産性を追及する新た

な営農形態とされているが、その多くは企業的形態を取り、計画生産を図る分業的運営が基本である。しかし、農業には分業的生産活動は適合しないのではないか。その理由は、農業は生産技術的には総合科学によって支えられるものであり、その営みには「農文化」の形成が含まれなければならないからである。生産性のみを追求する農業(?)は地域社会の維持に寄与することはなく、農村そのものの存在価値を見失う。最近では成功例と紹介される大規模農家や模範的集約農家でも後継者不足が顕在化してきていると聞く。大型農家が点在する農村では地域社会としての機能を維持し、「農文化」を護ることが困難である。経済的あるいは物質的生活水準の維持は可能でも、社会的あるいは文化的劣化は避けられない。今や、酪農においても稲作においても、農業の種別にかかわらず従事者の減少は著しい。農村の人口問題は単なる生産者の減少と言う意味を超えて、地域社会の崩壊へと直結する問題と言える。このように萎縮に向かう農村社会の中で生産動物医療に従事する多くの獣医師は働いているのである。

7 日本の農業の復興と獣医師の役割

日本の農業はこれからどうあるべきか。農業の復興に獣医師はどう関わりあうべきか。動物医療の技術者と言う枠を超えてこれに答えを出さなければならない。元来、「農業」は「食」を得るための生業ではあるが、「食」は長い歴史の中で、農村独特の趣を持つ基本的生活の核として形成され、多様な様式の「食文化」を生み出してきた。すなわち、「食文化」は「農業」から導き出される最も凝縮された人間の本質的活動であると言える。したがって、「食文化」は「農文化」を基本に発展してきたもので、古来農村社会の中で芽生え育まれてきた。しかし、近代都市の発展とともに「食文化」と「農文化」が分離され、都市生活の中では「食文化」の発展の基礎となった「農文化」が消滅していったのではないかと考える。その結果、「農文化」から乖離した都市型「食文化」が、我が国民の生活様式と文化的価値観あるいは道徳と呼ばれるものを根本から変えてしまったと言っても過言ではない。冒頭述べたように、年間11.1兆円もの食べ物捨てられている。さらに食品偽装事件や農薬残留、薬物混入事件が相次いで発覚している。その報道の過熱振りに国民の「食の安全、安心」への関心は異常な程に高まっているのに、自国の農業危機についての議論はいっこうに高まらない。これには農業を一次産業と分類し、二次産業や三次産業と同列価値化した経済産業論や、農業を都市への食糧供給産業と見なす都市国家論が背景にあるのではないか。農村は単なる食糧生産基地ではない。農村には農村の生産と消費を通じた「食文化」があり、「農文化」が存在している(いた)。しかし、現

代において国民の生活文化あるいは「食文化」を支える「農業」が失われつつある。それは現代の「食文化」が「農業」の崩壊を招いたと見るべきではないか。

こうした農村社会では活躍する獣医師の役割も昔のそれとは大きく異なってきている。国際競争に打ち勝つための生産至上主義の下、生産動物医療体制も、これまた生産性を重視したものが求められている。こうした現実に疑問を持ち、わが国の農業の在り方を問い直そうとする獣医師も多く出てきている。「我々獣医師の仕事は直接的には生産動物診療であり、その行為を通して営農を支援する事である。しかし、本質的にはそのことに留まらない。医療を必要とするに至った背景を明らかにし、問題点を解決しなければ診療行為そのものが真の評価の対象にならない。言い換えれば診療を通して農家そのものを診る事にある。農家の動物管理や飼養管理だけではなく、生産環境や営農状況、農業に取り組む姿勢や考え方まで踏み込んで考えなければならない」と述べる彼らの声は、現代の農家の苦しみを肌で感じている臨床家の偽らざる声であろう。しかし、食料生産者支援の視点からのみではその役割は十分ではない。自分の働く地域社会や文化を共有し、「食」の安全・安心を生産者と共に理解し、地域の「食文化」、「農文化」の理解者として貢献しなければならない。さらには、世界を意識した地域の指導者としての役割を担うべきである。私の知るところでは、臨床獣医師で構成される勉強会や研究会が地域および全国レベルで多数開催されている。幾つかの会に参加して感じていることは、会員の関心が診療技術の情報交換のみに集中することなく、日本の農業に貢献する獣医師のあるべき姿が議論されている事である。こうした獣医師の声を活かすNOSAI組織の運営が、生産動物医療を志す学生への大きな動機付けとなる事は間違いない。

さて、大学における獣医学教育はどうであるか。獣医学専門教育に偏り、診療技術教育に力が置かれ過ぎてはいないか。狭い領域の教育に専念していないか。広い視野を持った生産動物医療獣医師を育てる議論が十分になされているか。生産動物医療現場からの声が届かない、届いてもその声を反映した教育になっているか。酪農学園大学においても深く問われる課題である。さらに、生産動物医療獣医師の役割は、卒業後の活動の場である農業のあるべき姿が同時に問われて初めて意義あるものになる。獣医師が生産動物医療を通してわが国の農業にどう貢献するか。獣医学系大学の教育の中で語られるべき課題である。

これからの農業は、生産性のみを重視した近代農業から、農村に根ざす「農文化」の再生を主眼としたものにならなければならないと考える。このことは単に農村社会を再構築するという意味だけではない。農村社会の崩壊、すなわち「農文化」の消滅はいずれ「都市文化」の

崩壊に繋がるからでる。「生産者」対「消費者」,「農村」対「都市」,「農文化」対「都市文化」といった対立軸的思考ではなく,癒合の時代を導かなければならないと考える。農村は食料生産の要求に応えるだけでなく,個性を持ち,これを活かして都市との機能的融合の道を探さなければならない。消費者と生産者が協働して「食文

化」を創成し,さらには食料を生産する。そう言う時代が求められる。生産動物医療活動と共に,そこで働く獣医師として地域の「農文化」を担う事で,自らの役割を見出すことができるのではないか。単なる医療技術者ではなく,地域の人々との共生を通して農業の発展に貢献する獣医師でなければならない。